

11 人の弟子たちはガリラヤへ行き、イエスが指示した山に登り、そこで、復活させられたイエスに会いました。パウロが原始エルサレム共同体から受け取った復活伝承を記した一コリ 15:3~5 は、復活させられたイエスが弟子 12 人に現れたと記しています。マタイによる福音書によれば、イスカリオテのユダはイエスを引き渡して、後悔と絶望の内に自死してしまいましたので、残った弟子は 11 人です。その 11 人はイエスが捕えられる時に逃げてしまいました。彼らがイエスに会ったのはイエスが彼らを招いてくれたからです。そこにはイエスの弟子たちに対する大いなる赦しが示されています。

16 節に「疑う者もいた」と記されています。原文の直訳は「彼らは疑った」です。著者がここで弟子たちの「疑い」を記したのは、著者の時代に既に復活させられたイエスが弟子たちに現れたというイエスの顕現伝承が過去を語るに過ぎなくなっており、顕現を語るのみでは復活の疑いを克服できないという事情を反映しているのです。この福音書では復活させられたイエスの有様も、イエスを見た弟子たちの恐れや喜びも記していません。著者はイエスの死後 40~50 年を経た時代に生きるものとして、復活させられたイエスの姿によってではなく言葉によって信仰を確立する道を打ち出すのです。それを根拠づけるのは、イエスが今もなお「あなたがたと共にいる」という言葉なのです。

何故に一旦イエスを裏切った弟子たちがイエスの死後、イエスをキリストと信じ、宣教に立ち上がったのでしょうか。マルコ以外の福音書はこの問いに復活させられたイエスが弟子たちに現れて全世界への宣教活動を命じたからだとして記しています。そしてその原因として挙げ得るのは、弟子たちが復活させられたイエスに出会ったという体験だけなのです。また、マルコによる福音書では生前のイエスが世界への福音の伝達を示唆しています。このように「すべての民への宣教」がプログラムとしてはっきり掲げられるようになったのは、イエスが復活させられた後なのです。

最後の 20 節に、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と記されています。イエスが神さまにより復活させられたことによって、イエスは永遠の命を生き、いつも、どんな時にも、私たちと共にいるのです。それは、著者が一貫して語ってきた主題で、イエスの生涯と活動全体が「神さまがわたしたちと共におられること」を表すものでした。イエスにおいて、インマヌエル、神が我々と共にいる、という恵みが実現した、それが、この福音書が語っている福音なのです。